

東北・福島+埼玉=福の玉 が生まれ、ゆっくりふくらんでいきますように...

福玉便り

ふく たま だ よ り

2014
春の
号外

2014年3月11日(火)発行

企画・監修：西城戸誠・原田峻 執筆：『福玉便り』編集部 編集デザイン：NPO 法人ハンスオン埼玉
協力：(一社) 埼玉県労働者福祉協議会・生活協同組合コープみらい埼玉県本部

こんにちは

『福玉便り』と申します。

福島・東北から、未だに**5800人以上**の方(2ページ参照)が、ふるさとを遠く離れ、家族と離れ、埼玉に避難を余儀なくされています。

『福玉便り』はこうした方々に向けた唯一の新聞として、ほぼ毎月、4000部をお届けしています。埼玉県内で支援活動を行ってきた団体・ボランティアが共同して編集し、県内の企業の方が印刷をし、避難者のグループや自治体の方が配布をしてくださっています。

昨年引き続き、避難されている皆さんの状況が今、どうなっているのか、どんなことを感じて毎日暮らしているのか、しゃるのかを、あらためてお伝えしたい。共有したいと思ひ、この「2014春の号外」を編集しました。

福島・東北に戻る決断をした方、埼玉で家を購入された方、身動きができません。毎日、なんとか過ごしていらっしやる方...年々、多様になってきています。多様になるということは、気持ちの上でも孤立しやすいということです。

どうぞご一読いただき、避難されている方々の声に耳を傾けてください。そして、「これから」について、一緒に考えてください。

そして、皆様の声をお寄せください。

(編集長・西川)

福玉マップ

→6ページ



「避難」の現在。

→2ページ



自分としては「まだ3年も経っていないのか」という感覚なのに、周りから「3年経ちました」と言われちゃうことがつらいし、息苦しいですね。私たちは、何も終わっていないんですよね。

避難指示区域外 避難(自主避難)のいまとこれから

→10ページ



避難者組織のリーダーが考える 「今」と「これから」

→8ページ

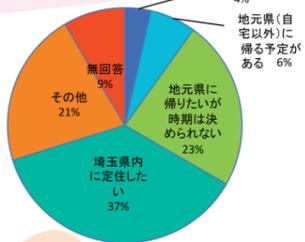


「訪問すると、『2年半前の3月11日以来、初めて福島の人と話ができた』とか、『避難生活を始めてから、町の様子も状況も分らないから、買い物には行くけれど、それ以外は出ない』という方も結構いらつしやいます。」
「避難者だから」と言われるのが嫌で、ここで生活するためにものすごく気を使っています。まず遠慮なく避難者同士が話をするのが大事。それと同時に、地元の人たちと一緒にできることも大事」



「訪問すると、『2年半前の3月11日以来、初めて福島の人と話ができた』とか、『避難生活を始めてから、町の様子も状況も分らないから、買い物には行くけれど、それ以外は出ない』という方も結構いらつしやいます。」

・住宅が決まらなると落ち着けないので、期限のない家に住める様な基礎ができた前に向けて考えることが出来る様な気がします。自分の位置がわからなくなっているから、(富岡町、50代男性)



『福玉便り』読者アンケートから
→16ページ

自治体による 生活支援の 現状と課題

→4ページ



「支援者」たちの「これまで」と「これから」
→14ページ

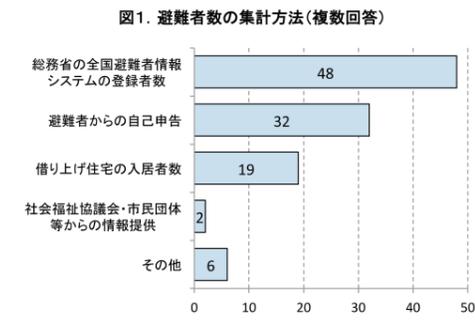
自治体による生活支援の現状と課題

埼玉県では、東日本大震災の発生直後から、多くの自治体が体育館・福祉センターなどで避難者を受け入れてきました。2011年夏までには避難所のほとんどが閉鎖となりましたが、「借り上げ住宅制度」の導入に伴って、各地の民間賃貸住宅あるいは公営住宅に避難者の方々が入居することになりました。2014年1月時点でも、埼玉県内63市町村のうち58市町村が避難者を受け入れています(3ページの地図参照)。

しかしながら、これだけ多くの避難者を受け入れるというのはどの自治体にとっても未曾有の出来事であり、住民票のない「住民」に対してどのような対応を取るか各自治体が判断を求められてきました。それでは、現在、埼玉県内の自治体は避難者の方々にどのような対応を行っているのでしょうか？
埼玉県内の全市町村を対象としたアンケート調査(2ページ参照)によって明らかになった、自治体ごとの生活支援についてお伝えします。(編集部・原田)

■避難者数を把握することの難しさ

各自治体にとって最初に大きな難関となるのが、避難者数の把握です。2〜3ページでは各自治体が集計した避難者数をお伝えしましたが、その集計方法は「総務省の全国避難者情報システムの登録数」が最も多いものの万能ではなく、「避難者からの自己申告」や「借り上げ住宅の入居者数」などを照合するなど、自治体ごとの試行錯誤が見られます(図1)。



とりわけ各自治体の担当者が苦勞されているのが、他地域への転出者の把握です。自由記述で転

ません。そのため、埼玉県内の自治体の中で、水道料金減免の実施の有無にバラつきが起きることになりました。

2014年1月時点で、水道料金の減免を実施しているのは、避難者を受け入れている58自治体のうち、29自治体。元々実施していなかった自治体が18、既に打ち切った自治体が11となります。

水道料金の減免を実施中の29自治体の中でも、全額免除が15自治体、基本料金免除が9自治体、基本料金以外免除が1自治体(未記入4自治体)と、減免の内容には自治体ごとの違いが見られました。また、減免の時期についても、「打ち切り時期は決まっていない」が19自治体、「平成26年3月に打ち切り予定(延長検討中も含む)」が10自治体となっています。

このように、たまたま避難先の自治体が違っただけで、水道料金の減免に差が出てしまっているのが現状です。「平成26年3月に打ち切り予定」となっている自治体には次年度以降の延長をご検討いただくとともに、埼玉県には水道料金を一律で減免していく制度をぜひ検討していただきたいと思います。

出者の把握方法を尋ねたところ、「避難者からの申告、住民課への転出届出、全国避難者情報システムの情報、水道課への水道使用停止連絡。避難者から何らかの方法で申告がない限り把握できないため、適切な支援を行えない場合がある」、「他地域等への転出時には必ず報告するようにお願いしております。しかしながら特に自主避難者については、報告をいだけず郵便物の不着にて気づくという案件もあります。」など、申告の無いままの転出に苦勞している声が多く、自治体から寄せられました。読者の皆さんには、転入・転出に際する避難先自治体への連絡を今一度呼びかけたいと思います。

■自治体ごとの支援のバラつき〜水道料金の減免を例に〜

また、避難してきた方々にどのような生活支援を実施するかは、各自治体の独自判断に委ねられてきました。その代表例として、水道料金の減免があります(下の図参照)。

他県の状況を見ると、例えば東京都のように、一律で水道料金の減免を実施している自治体もあります。しかしながら、埼玉県ではそういった支援を実施してい

■先進的な自治体の取り組み

水道料金に加えて、埼玉県内のいくつかの自治体では、独自の生活支援を実施しています。実施している生活支援について尋ねたところ、最も多かったのが「広報の配布で、情報誌やイベント案内の配布を実施している自治体も含めると、39自治体何らかの情報を避難者に送っています。

広報の配布以外にも、下表のように、自治体ごとに多岐にわたる生活支援が実施されていることがわかりました。その他、「避難者支援補助員を避難者の中から市の臨時職員として雇用。戸別訪問や電話で生活、健康状況等を聴取している。又避難者の相談窓口となっている。」(越谷市)といった取り組みも見られます。

水道料金の減免を始めとする多岐にわたる生活支援は、避難生活の負担軽減となるだけでなく、受け入れ自治体が避難した方々を「忘れていない」ことを示す大事な手段となっています。

■自治体担当者からの声

最後に、今回のアンケート調査では、いくつかの自治体の担当

課の方々から、避難者支援の難しさについて、率直なご意見を寄せいただきました。

「私は震災当初から借り上げ住宅への避難者への支援を担当しているが、震災から3年が経ち避難者の中から地元に戻れないのではないかの思いが伝わってくる。避難者として居住するか、このまま埼玉県民として居住するか判断が難しいが、そういう時期になっているように感じます。また、個人情報保護のため避難者の情報が自治体内でも公開となっていないため、支援の足かせとなっている気がする。」

「すでに当町への住民票を移し被災者として支援を受けることに抵抗を感じ、そっとしておいてほしいと願っている方もいます。またほとんどの方が就職し定期的に訪問する際に面会できないのが現状です。今後は一律的な支援を行うのではなく、避難者それぞれのニーズを把握し支援を行っていくことが課題となっています。」

また、自治体同士での情報交換を希望するご意見も寄せられました。

「他の自治体の活動や取り組みについて良い事例を共有したいので、教えていただきたいと

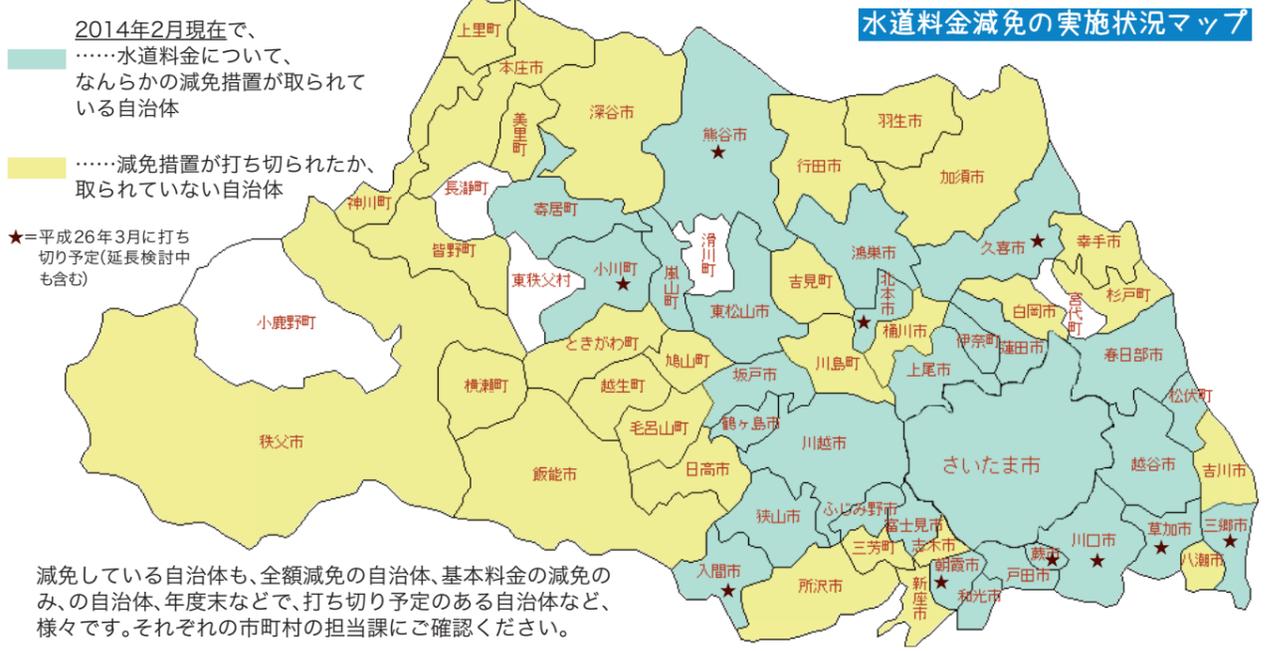
思います(特に規模が小さい自治体)。人数が少ないため独自に行うことが難しいので、広域的に取り組めたらと思います。」

他方で、「住民」ではない避難者の方々への支援を自治体の予算で実施するには限界もあり、支援の継続が難しくなっているという声も寄せられました。

「支援事業として、まごころ屋食会の開催や年越し支援金1人1万円を12月に支給している。教育支援金として小中学校の入学児童へも入学準備金を用意しており、交流事業としてバスハイクも実施しております。しかしながら寄付金等も激減しており、平成26年度以降の支援策等については現状を維持することさえ危ぶまれます。」

長期化する広域避難に、今後どのような対応・支援を実施していけばいいのか、自治体の職員の方々にとっては私たち住民にとっても、試行錯誤が続いています。官民の率直な連携・情報交換ができるよう、『福玉便り』編集部としても自治体職員の方々に「福玉会議」への出席などを呼びかけていく予定です。この特別号が、4年目に向けた更なる連携の土台作りのきっかけとなれば幸いです。

水道料金減免の実施状況マップ



減免している自治体も、全額減免の自治体、基本料金の減免のみ、の自治体、年度末などで、打ち切り予定のある自治体など、様々です。それぞれの市町村の担当課にご確認ください。

戸別訪問・電話連絡	越谷市、草加市、三郷市、狭山市、戸田市、新座市、富士見市、ふじみ野市、坂戸市、鴻巣市、日高市、加須市、小川町
義援金・支援金や生活用品の配布	さいたま市、川越市、越谷市、草加市、狭山市、新座市、富士見市、鴻巣市、春日部市、小川町、吉見町
循環バスの無料券・割引券の配布	川口市、川越市、上尾市、富士見市、東松山市、坂戸市、熊谷市、桶川市
幼稚園・保育園の補助	さいたま市、川越市、草加市、吉川市、朝霞市、行田市、志木市
交流会の実施	草加市、三郷市、狭山市、富士見市、ふじみ野市、鴻巣市
健康診断・予防接種の補助	さいたま市、吉川市、朝霞市、富士見市、蓮田市、桶川市
商品券・お米券・市民プール無料券・公衆浴場無料券などの配布	川口市、上尾市、富士見市、鶴ヶ島市

※本表は現時点で把握できた項目のみ掲載しております。抜けている項目や、新たに始められた項目がありましたら、編集部までご連絡ください。

交流会・グループ

常設の場所・お店

東北・福島+埼玉=福の玉が生まれ、

福玉

ふく たま

マップ

作成：福玉便り編集部

24 ふるさと交流サロン【熊谷市】

コープみらい熊谷のメイト室で2ヶ月に一度の交流サロンを開催しています。ネット21熊谷と連携して埼玉北部地域の避難者へも交流サロンやイベントの案内をしています。

23 羽生つながりカフェ【羽生市】

「パープル羽生」の和室で毎月第2日曜日に開催しています。一緒にお昼を食べながら、お話しませんか？

埼玉県内の各地で、被災者・避難者と支援者が一緒に交流の場をつくっています。ぜひご参加・お立ち寄りください。お待ちしております。

22 “想い”【鴻巣市】

鴻巣市赤見台の避難者から派生。「東京電力による賠償説明会」、クリスマス会などの開催や、情報誌「想い」の発行、各種情報発信活動をおこなっています。

21 きずなの会【東松山市】

雇用促進住宅で結成された「きずなの会」が毎月交流会をおこなっています。

20 鳩のつどい【鳩山町】

JAXA 鳩山宿舎にて、「鳩のつどい」を月に2回実施しています。

19 ここカフェ【坂戸市・鶴ヶ島市・川越市】

『心の内を話せる場』のためにはじまった、ゆるやかな茶話会です。お子様連れも大歓迎です。主催：実行委員会+社協

18 おあがんなんしょ【ふじみ野市】

毎月1回の交流会です。第1部：【いろいろっぱた】避難されている方々が仲間同士で本音で語り合う時間を大切にしています。第2部：【お茶にすっぺ】協力者とみんなでワイワイガヤガヤ楽しい時間です。

17 お茶のみ交流会【富士見市】

市内に避難してきた方々の「お茶のみ交流会」を2か月に1回のペースで実施中。

16 青空あおぞら【所沢市】

2013年3月から避難者の呼びかけで交流会がはじまりました。赤ちゃんからご高齢の方まで、幅広い年齢層の方々が参加されています。お子様連れのパパママも安心してご参加ください。

15 新座さいがいつながりカフェ【新座市】

新座市にある国家公務員宿舎の集会所で、第2土曜日に交流会をしています。主催：震災支援ネットワーク・新座

14 なみえのしゃべり場 浦和の8畳間【さいたま市】

(浪江町復興支援員 埼玉事務所) 浪江町が埼玉県内に配置している復興支援員の事務所です。浪江町民に限らず、気軽に遊びに来てください。平日10:00~17:00 さいたま市浦和区常盤 6-4-21 ときわ会館 4F 檜の間

ライフサポートステーション

連合埼玉・埼玉労福協が運営している事務所です。ライフサポートステーション(ネット21事務所)は、川越、久喜、熊谷、大宮にあり、お茶会や交流会に無料でご利用いただけます。どうぞ、お気軽にお越しください。お問合せは、(一社)埼玉労福協 048-833-8731 まで。

25 お茶つこふるさと会【久喜市】

ネット21久喜事務所で月一回開催されている避難者交流会です。

3 社協と地域と生協のサロン【加須市】 双葉町社会福祉協議会へ協力参加

①『協働ボランティアおしゃべりサロン&昼食会』…毎月第3木曜日に主に高齢者の方と味噌汁とおにぎりで地域の方々と情報交換の場に。②『ママカフェ&こどもひろば』…年3回春休み、夏休み、冬休みにランチあり。お母さんがたのよりどころとしての場に。

4 シラコバト団地被災者の会・ひまわり【上尾市】

県営シラコバト団地に避難してきた方々を中心に、月1回の情報・物資の交換会をおこなっています。(2014年3月11日から名称が「東日本大震災に咲く会ひまわり」に変わります)

5 上尾向原宿舎被災者の会【上尾市】

小規模人数ですが、つながろう福島!を旗印に、毎月定例会を行ってコミュニケーションを図っています。上尾近隣にお住まいの方、連絡下さい(^^)つながりましょう!

6 杉戸元気会【杉戸町】

国家公務員宿舎杉戸住宅で、交流会「つつじの里サロン」を毎週木曜日に実施。また、富岡町の佐藤さんを中心に立ち上げた多機能型通所療育施設「JWA デイサービスすぎと」にて、毎週水曜日にパソコン教室も実施しています。

7 春日部つながりカフェ【春日部市】

毎月1回コーププラザ春日部で交流会をしています。近隣に避難中の方はぜひお立ち寄りください。

8 一歩会【越谷市など】

越谷市を中心に300名の会員が所属し、月1回のイベント・交流会や見守り、地域の方々と共同の農作業などをおこなっています。また7月から、避難者の集まる会「ひだまり広場」をはじめました。

9 「ひまわり」の会【川口市】

川口市に福島県に避難してきた人達を中心に、サロン(茶話会)を月1回開いています。

10 被災者つながりの会【草加市】

5月につながりの会が設立されました。月1回、東北復興支援販売などをおこなっています。

11 相双ふるさとネットワーク

福島県相双地区から避難した方々と同じ地元出身者を中心とするネットワークです。

13 放射能から避難したママネット@埼玉

【さいたま市など】

12 さいがい・つながりカフェ

【さいたま市など】 広い和室で食べながら、飲みながら、心ゆくまでおしゃべりしましょう。月2回 木曜日。主催さいがい・つながりカフェ実行委員会 場所：With You さいたま

避難・生活再建・コミュニティ…

避難者組織のリーダーが考える「今」と「これから」

埼玉県内では各地で避難者の方々のグループが結成され、地元行政・ボランティアと連携しながら、交流会や賠償相談会といった取り組みを進めています(6〜7ページのマップ参照)。
「福玉便り」編集部では、2013年2月に、避難者グループのリーダーの方々の座談会を開催しました(「福玉便り」2013春の号外に掲載)。今回も、避難者グループのリーダーや復興支援員として活躍されている6名の方々をお招きし、この1年間の変化や、今後のこと、必要とされている支援などについてお話しいただきました。(まとめ＝編集部・原田)



■この1年間の変化

永田(編集部) まず、2013年の1月から12月までどういうことを考えてどんな活動をしてきたのか、1年前とどう違うのか、お話しいただけますか？

佐藤(淳) 浪江町が山形県・新潟県・埼玉県・千葉県・京都府に、町の復興支援員を配置しています。埼玉は支援員3人と、その活動サポートするコーディネーターの4名で、埼玉県内に避難されている約330世帯の浪江町の方を個別訪問しながら、避難生活の困りごとや体調の変化などを聴いています。あわせて埼玉県内には浪江町以外の方もたくさんいらっしやるので、これは浪江町と町の事業受託者の埼玉労協の了解

のもと、他の地域の方も可能な限り訪問しています。



橘光頭さん
2011年4月に浪江町から上尾市に避難され、県営シラコバト団地を中心とした避難者グループ「ひまわり」の代表を務める。

7月から訪問を始め、最初は「帰りたい」という方が多くいらっしやいましたが、最近は「帰れないでしょう」という人も増えてきました。「埼玉に住みたい」「いわき市に家を買った」というように、家を確保した方が増えたというのを感じています。ただ、年齢が高い方には、「地元に戻りたい」という声が強くなります。

鈴木 南相馬市小高区から鳩山町に避難しております。南相馬市の小高区は旧警戒区域ですが、周りでは避難指示解除の原町区・鹿島区に帰る人がポツポツできています。

鶴沼 騎西高校のなかでカフェ珠寿という常設のサロンを運営していました。

旧騎西高校は震災当初は1400人くらいの人が集まっていた。一教室に20名が雑魚寝状態で、生活サイクルの問題などで子どもがいる世帯にはかなりキツイ状態で、騎西高校周辺のアパートに引っ越しが増えました。

避難所閉鎖という町の意向で2013年10月末で運営をやめて、移転先を探していました。

鈴木 私は2013年4月から鳩山町内の一軒家を借りています。賠償もそれなりにやっています。でも家内は「おしゃべりの場」がほしいと言います。ちょっとしたふれあい、おしゃべりの場を大事にしたい。鳩山になんていいますが、「じゃあここに住もうか」と言つと、それも首をたてにぶらない。悩ましいです。

橘 シラコバト団地で一戸建てを購入した方は、お一人は80歳を超えていて息子さんが近くに住んでいる方も、もう一軒は単身の方。いずれにしても動きやすかった事例です。家族・仕事・コミュニティの都合で動きにくい家族もあるのではないのでしょうか。



篠原美陽子さん
2011年3月に浪江町から鴻巣市に避難され、2011年12月から会報誌「想い」を発行。



永田 12月7日の新聞に復元のために、一定程度の住民のコミュニティづくりをしていければ、と思います。



鴻巣にてクリスマス会(主催「鴻巣」想い)。総勢76名の方が集まって、美味しい料理を囲んで楽しい時間になりました。「1000日がんばりました」と一人ひとりを互いに表彰しました。2013.12.14



「上尾シラコバト団地 被災者の会 ひまわり」の会合 2013.7.6

たが、1月からは月に1回、双葉町の社会福祉協議会の会場をお借りできることになりました。「何かあったらここ」という安心できる場所がなくなるので、今後としては、新しい拠点づくりをどうするかを考えていきます。

橘 入居から現在までの変更をお話します。私が入居した2011年4月は、シラコバト団地に15世帯がいました。1年かけて最大61世帯になりましたが、そこから退去も増えて、2年近く大きな変動がありませんでした。

それが2013年12月に6世帯の退去者が出ました。そのうち、お二人の方が上尾の近所に一戸建てを買ったそうです。「2年数ヶ月は集合住宅で我慢したけれど、一戸建てに住みたい。年末年始を自分の家で過ごしたい」という心理状態があったのではないのでしょうか。



佐藤淳一さん
2011年4月に浪江町から所沢市に避難。2013年6月から浪江町復興支援員(埼玉駐在)に。

興庁のデータが出ていて、6割が「戻らない」と決めている、と答えたそうです。その辺りはどうですか？

鶴沼 以前、アンケートを取ったときは「戻らない・わからない」が3割ずつでした。兵糧攻めにあつて諦めた、というのが現状だと思っています。「避難者」と言われ続けているのも精神的に辛い。これから何をやるか、ということ考えたほうが、気が楽なんじゃないか、と思います。



浪江町復興支援員のみなさん

■コミュニティを維持するために

永田 根幹は浪江や双葉の人間だが、家族と一緒にいるための決断として、家を買うということでしょうか。そこで全員が家を買うのが難しい中で、「災害公営住宅を杉戸に」という動きがあります。

佐藤(純) 借上げ住宅も平成27年3月までしか保証されていないので、それでは子育てや教育の未来が見えてこないのと、とりあえずは災害公営住宅というものを建設する、ということを要求しています。

私自身はどこに住んでもいいんですが、自分の故郷とは何なのかという根源的なことを考えるとき、そこにコミュニティがあつて、独特の文化・方言・行事、そういうものが、それぞれの避難先で作れるという見通しがあれば、そこに住めるのかな、と。コミュニティを維持するためには、一定程度の住民のコミュニティづくりをしていければ、と思います。

■ネットワークを使って助けを

永田 一方では自分の家を建てる方もいれば、2年前の生活が続いている方もいる。そ



佐藤 純俊さん
2011年3月に富岡町から杉戸町に避難され、杉戸町を中心とした避難者グループ「杉戸元気会」の会長を務める。



佐藤純俊さんが中心となって立ち上げた、障害児療育施設「JWA デイサービスすぎと」がオープン。開所式でのワークショップ。2013.6.1

■自分の家がないと甚盤がない
永田 全体としては、避難元の地域が大きく改善されたわけではないので、避難先の埼玉での生活に大きな変化はない。ただ、変化があるとすれば、埼玉県内の居住していた近くに住居を買う方が出てきたことでしょうか？

私の個人的な経験から言うと、あくまで「仮の家」なんです。「自分の家がないと甚盤がない」という不安があつて、毎学期単位で、「転校をどうするか、主人のところに行くか、このままとどまるか」が落ち着か

ている方がそこまで辿り着けるのかと考えています。
鶴沼 ここ1ヶ月2ヶ月の単位でどうしようというよりは、3年5年と長くいられる場所という条件を想定して家を買つたり引越したり、という方が多いと思います。埼玉県に買った方もいますが、奥さんの実家の近くに引っ越す方、単身赴任の旦那さんの近くでやつていこうという方もいます。あとは子どもの学校の関係ですね。高校卒業するまでなど、これらを考えている。子どもが成長した頃には、双葉のまちづくりがどうなっているかわかるだろうから、その時判断しようという方もいます。



鈴木直清さん
2011年3月に南相馬市小高区から鳩山町に避難され、「鳩山町避難者の会」の会長を務める。

の辺はどうお考えですか？

佐藤(淳) 訪問すると、「2年半前の3月11日以来、初めて福島の人と話ができた」とか、「避難生活を始めてから、町の様子も状況も分からないから、買い物には行くけれど、それ以外は出ない」と言う方も結構いらついています。

鈴木 鳩山町の市民のサークルからお誘いを受けて、私もハイキングに行ってきました。他方で、「テレビだけが友達」という方もいます。交流会に呼びかけても新しい人はこないという現状です。

鶴沼 主人の会社が浪江町なんですけど、拠点を作り直して、復興はこれからさき、というところなんです。その間子どもは成長していますが、子どもの進学先が分からない。長年関係を築いてきたホームドクターもない。

双葉町は役場がいたので、コミュニティはできていたけれど、同じ加須市内の双葉町以外の出身の方はどうしているのか？

か。新しいコミュニティづくりを進めつつ、これからの生活を決められる情報を提供できればいいかなと思っています。

橘 シラコバト団地で、自主避難の方が半数以上、さらに宮城・岩手の方がいらして、浪江町は私だけなんです。全体としての動きは取れないので、各々の希望に沿うように工夫しています。東電賠償は篠原さんのところに案内したり、復興住宅のときは佐藤純俊さんに来てもらったり。ネットワークを使って、自分のできないことを手助けしてもらって、という風に考えています。

佐藤(純) エリア限定の支援には限界があり、広域支援ネットワークとの提携が必要になってくるのではないのでしょうか。福島県と行ったたり来たりすると、ということも含めて。私は「全国福島県人会の会」を計画していて、将来の老後・介護の問題や住宅の問題について、生きた情報を提供できるような支援組織を構築したいと考えています。

篠原 鴻巣はまず高崎線ラインで繋いでいこうと考えています。熊谷や上尾と繋がってききましたが、今はまだトップの情報共有の段階です。トップ同士の区分けをしなくてはならない。豪華なイベントが充実していることが、「支援」というのだから、「生活」というキーワードのところに「支援」というものの視点を当てなくてはならないのではないかと、というふうに思います。



シラコバト団地
東日本大震災追悼式典



上尾シラコバト団地
被災者の会「ひまわり」主催の追悼式典 2013.3.11



「同じ境遇の方にはじめて出逢いました」ここカフェ@東武東上線 2013.05.12



ふじみ野市のおあがんなんしよの交流会。森林公園でのパーベキュー&森林浴が、雨により急遽サロンに切り替えての交流会 2013.10.20

■これからの支援は

永田 3年目を迎え、「自分の人生をどうするか」という決断を迫られている中で支援も中身が変わってくると思います。「支援」が目的になつてしま



埼玉労働協主催ときがわ村にての川遊び&BBQ 2013.8.11



永田信雄さん
一社)埼玉県労働者福祉協議会事務局長。震災以降3年間、県内各地の避難者、支援者との交流、協働を実践してきた。

いかんか、と安心してやるか、ということが一番大事なんじゃないかと思えます。ただ、その生活なり安心を支えていく大事な要素の一つはお金でもあるので、そのバランスをうまく取ることが重要だと思います。それに対して我々がどのように支援していけるか、というのが今後の課題です。

佐藤(淳) いかんか、と安心してやるか、ということが一番大事なんじゃないかと思えます。ただ、その生活なり安心を支えていく大事な要素の一つはお金でもあるので、そのバランスをうまく取ることが重要だと思います。それに対して我々がどのように支援していけるか、というのが今後の課題です。

「避難者だから」と言われるのが嫌で、ここで生活するためにも、なるべく使っているものを、まず遠慮なく避難者同士が話をするのが大事。それと同時に、地元に加須の人たちと一緒にできることも大事。私も書道教室に通つてい

る。上下水道の減免についても、「隣の市がやめたから」という形で問題を処理しているところがある。そういう意味でも地域の連携は必要だと思えますし、「行政は行政の責任で、自治体に避難されている方へのサービスをしていこう」という声を伝えていこうと思つています。

鈴木 生活の支援については、埼玉県で申し分ないと思つています。でも一番は、双葉とか浪江とか自分の属する自治体が、物事を深刻に捉えているかどうか。まやかしの情報がはびこっているんじゃないか、ということを感じています。

橘 先日忘年会があつて、ずっとボランティアしてくれている方に「寄付もできなくてごめんください」と言われたけど、「来てくださることが支援なんですよ」とお伝えしました。たしかにお金や情報の支援も大事だけれど、寄り添ってくれること。田舎で同級生や近所の人、が身近にいたコミュニティが破壊された今、寄り添うことが支

士がお互いの顔色と温度差を理解して、「こういう人たちがいたよ」ということをお伝えしていくことがコミュニティづくりになつていくのかなと思つています。

も、「隣の市がやめたから」という形で問題を処理しているところがある。そういう意味でも地域の連携は必要だと思えますし、「行政は行政の責任で、自治体に避難されている方へのサービスをしていこう」という声を伝えていこうと思つています。

体Bでは、「福玉便り」に興味を持って、取り寄せてチラシと一緒に発送してくれました。自治体Cでは、「行政のシステムがないので対応できない」とのことでした。自治体Dでは、以前はチラシを発送してくれたのに、担当者が変わって、「あれはたまたま。今回はないよ」と言われてしまいました。

■自治体ごとの対応の違い

永田 横の繋がりができる中で、行政の対応が必ずしも十分ではないことが分かってきました。積極的にサポートしてくれるところもある一方で、自分の市にどれだけの避難者がいるのか把握していないところもあ

自治体Aでは、「福玉便り」を毎月発送して、チラシもコピーして同封してくれました。自治体Bでは、「福玉便り」を毎月発送して、チラシもコピーして同封してくれました。自治体Cでは、「福玉便り」を毎月発送して、チラシもコピーして同封してくれました。自治体Dでは、「福玉便り」を毎月発送して、チラシもコピーして同封してくれました。

旧騎西高校の生徒ホールでは、町民が気軽に集まり、情報交換や悩みを話し合える「場」となっていました。避難所閉鎖後、双葉町社会福祉協議会加須事務所(いきいきサポートセンター)で、生徒ホールで双葉町の鶴沼さんが行っていた「カフェ」を「ボランティアカフェ」として継続しています。



埼玉県横断バスツアー&交流会。北上尾駅～県民活動センター～首都圏外郭放水路～杉戸町エコ・スポいずみ、アグリパークゆめすぎと(道の駅)というツアーに、たくさんの方が参加されました。2013.6.2

「避難と判断」を理解して欲しい……

避難指示区域外避難(自主避難)のいまこれから

埼玉県内では、避難指示区域外(以下:区域外避難)の方は「少ない」とされていますが、実のところは分かりません。自治体へのアンケート調査からは、今なお、避難者登録をしていない方が数多くいらっしゃるということが分かっています(2~3ページ参照)。

「福玉便り」編集部では、区域外避難の皆さんをお招きして、2つの座談会を開催しました。ひとつは、2013年12月9日のトークセッションの二環として行われた座談会。もうひとつは、2014年2月にクロアズドで行われた座談会です。本文の中で、そのふたつを明確に分けていませんが、両方の座談会に参加して下さった方の言葉をまとめさせて頂いています。ご参加くださった6名の方々、ありがとうございました。

区域外避難の方や、その方が抱えている問題が見えにくいのは、数が少ないせいだと思われるかもしれませんが、実際はそうではなく、「避難を判断した根拠が、放射能をどう考えたか」という「わかりにくさ」のせいでもあることが今回の座談会の中で聞かれた言葉にも示されています。「本音を語る」ということに、一定の配慮がないといけないという区域外避難の現状を、私たち「福玉便り」編集部は深く考えさせられました。

区域外避難にまつわる問題を、私たち編集部を含めた支援側の課題として、お読みくださる皆さまにも一緒に考えていただければ幸いです。(まとめ:編集部・伊藤)

◆避難のきっかけ

Aさん ネットで「危ない」という情報が流れ、テレビとは全くちがいました。ガソリン、水、食料がない中で生活していました。「ここに残る」という祖母と泣く泣く別れて出てきました。

Bさん 私はラジオしかなかったのですが、原発の冷却水があと何センチ、というのを報道していました。その何センチ、を報道しなくなったときに「まずい、爆発するんだ」と思い、行けるところまで行こう、と逃げました。

いいのか、という情報もなくて……。

Cさん 自分としては「まだ3年も経っていないのか」という感覚なのに、周りから「3年経ちました」と言われちゃうことがつらいし、息苦しいですね。私たちは、何も終わっていないですよ。

こちら(関東)の人にも、「あなたの地元は、戻れる地域だから戻れるんでしょ?」と言われて本当に、ショックでした。でも、まあ、世の中の空気がそうなら、仕方ないのか、というあきらめの気持ちもあります。言う側の気持ちもわかります。そういう理解されないという思いを抱えたときに、「ショックだった」と言えるようになればいいんですが、心配です。そこを見捨ててしまったらこの問題は解決できない。ひとりひとりがんばらばらに大変なのだ、と知ってもらうところが大事だと思います。



とくに、自主避難の人たちには、自分の思いを言えない人たちがいます。思いを言い合える場所づくりが必要です。と思っています。

Eさん 私たちは、自主避難組

Cさん 私は当時妊婦でした。とにかく命が危ない、と思って出てきました。上の子どもも小さかったし。迷っている暇もありませんでした。

Dさん 私の場合は都内で仕事をしていた夫を頼ってこちらにきました。一番近い道を通ってきましたが、そこはすごい線量が高かったと後で知りました。

Eさん 私はテレビで定点カメラの映像で、爆発するのを観て、「これはまずい」とすぐに避難しました。

と強制避難組がいつしよにいまして、やっぱりだんだん温度差が出てきます。自主避難組は自力で生活を建て直さなければならぬ、強制避難組は東電との交渉問題などあるので、そこらへんの違いは出てきています。でも、違いは踏まえた上でうまく協力できることは協力していきたいと思っっています。

◆放射能のこと

Bさん 私は、避難元の周りの親族や知人から「どうしたら戻ってくるの?」と聞かれるのが困ります。確かに、私が避難を決めたけれど、避難元がどういう状況になったら帰るつもりなのか、私自身が、分からないんです。「福島」ではなく、福島の「汚染」が嫌なのに、「福島が嫌」なんだと思われてしまっんですよね。そうじゃないんです。震災前に戻れるなら、今すぐにでも福島に戻って暮らしたいのに。

放射能は見えないから、風景は何も変わっていないから、そう言いたくなる気持ちはわかるんです。でも、いつも、私は責められているんだ、と感じています。

Fさん 例えば福島県の状態って、こちらでは今、ほんとにテレビで映さない、映されない、新聞でもやっぱり取りあげる程度です。

私は4月に戻るつもりなの

Fさん 鮮明に思いだせる部分と、記憶から排除しようとしているような、ぼんやりした部分があって……沿岸部だったので、津波もあり、余震と放射能から子どもの命を守るために避難しました。

◆「避難の判断」を理解されない悩み

Bさん 当時もいまもですが、近所のひと、友だち、親戚、それぞれが違う判断をしていて、放射能のことを「安全だ」と

で、福島県のことを勉強したり、調べたりしながら、追究していくと、ほんとにシビアな問題がごまんとあるんです。事故による放射能汚染だけではなく、ガレキの焼却問題とか……。

8千ベクレル以上の物を燃やすすってという施設の建設を進めている現状があるんですね。その8千ベクレル以上3万ベクレル未満という物はたいへんな放射性廃棄物なんです。その物質を燃やして小さくする、灰にするための焼却施設の事業計画が今、どンドン、どンドン進んでしまっっています。私としては、原発を誘致した時の状況と似ているんじゃないかとすごく思っっています。

こういった大変な時代に子どもを大人にしていく、成長させていくってこういうことを考えないと、やっぱり私たちの世代の親がきちんと考えなくちゃいけないと思っっています。

Bさん そうなんですよね。でも、この問題が風化していつかいるという不安もありますよね。福島に戻ったときに溶け込めるのかという不安もあります。避難先でも、強制避難の人たちは自立に向かっています。自主避難の人たちは経済的・心理的に取り残されていると感じています。

思っっています。放射能は目に見えないし、すぐに影響が出ない。おきるかもしれないし、何もおきないかもしれない不確かなものです。だけど、震災前は年間1mSvだった基準が20mSvつまり、20倍に変えられたことへの不信感があります。国は20倍になったところで、「個人線量計で測って自己管理しろ」と言うが、そんな状況で生活できるのか?と思うんです。

Aさん まるで棄民だな……と感ぜてしまっこともありますね。あとは、正しい情報がないことへの危機感がありますよね。たとえば、海開きの後に汚染水のことが発表されたり、甲状腺がんが74人いても「放射能の影響はない」と言いきってしまった。安心・安全という言葉がもう、信じられない。

Cさん うちの、尿検査で、家族みんな放射性物質が出たんです。リスクがあつて福島には戻れないと私は考えています。でも、福島には親戚のコミュニティがあつたから戻れるなら戻りたいんです。

Bさん 100歩譲って、国

◆これからのこと、具体的に必要なこと

Cさん 高速道路の無料化も、対象が母子避難だけになつてしまつたんです。でも、自主避難であつても、お父さんも一緒に避難している世帯だつてあります。そうすると、おじいちゃん、おばあちゃんが孫に会いたくてもすぐに会えないんです。家族の分断は父子だけでなく誰にも起きていることを分かつてほしい……。

それに、福島では、両親や親せきが子育てを手伝ってくれていたんですが、それが一気になくなつたんですね。今では子どもが具合悪い時に面倒を見てくれる人がいません。また、周りでは、次の子どもが欲しいと思つても、妊娠中に何が起きるか分からないので、あきらめてしまっ人がいます。母子避難でも安心して産み育てられる環境が必要だと思っっています。

Aさん 国に対して、「もっと支援してください」とは言いにくいんです。なぜなら、福島県に住み続けている人からみたら、「逃げたのは自己責任では?」と思うだろうし、埼玉の警戒区域からの避難している方からみたら、「家があるのに」と思われるかな——という、申し訳なさがありますから。

の支援はあきらめるから、せめて「避難してもいい」と国に言っしてほしいですね。

Aさん 埼玉県には警戒区域の方が多く、行政も警戒区域優先という対応だったのもあつて、「私は被災者と言っつていいのだから」という申し訳なさで、避難当時がありましたね……。

「家があるからいいな」と言われたら、もう、何も言えなくなつてしまっんです。それは、本当にその通りなので……。

Fさん そうですね。「なんで避難してきているの?」て聞かれることが多くて、それを話すにはたぶん、何時間あつても足りないんですよ。伝える時間があれば伝えたいところなんです……。

◆暮らしの悩み

Cさん 私は、お金と仕事の悩みがあります。保育園には入れない、短時間の仕事もない。仕事が安定してお金に余裕がなければ、少しは方向性を考えられると思うけれど、働ける環境がないんです。

Dさん 私は、こちらにきて、子どもの埼玉県の高校受験に ついて、よく分からなくて困りました。「北辰テスト」もよくわからないし(=埼玉県内の中学3年生が必ず受ける、民間団体の学力試験)、受験できる高校もたくさんありすぎてどこを受けたら

Cさん とにかく、自主避難生活を続けるためには、住宅(打ち切られてほしくない)・就職(安心につながる)・コミュニティ(思いをはき出せる場所)の3つの支援が重要ですよ。

Dさん コミュニティは大事ですよ。知らない土地にポツと入ると、本当に誰とも何もお話ができないんです。話ができない日々が半年ぐらいいつくとほんとに人間ダメになっちゃうんです。私、必要ないんじゃないか、と思っこともあつたので……。「私に何かできることがあればなんでも言っってください」って言えると私も生きていけるんです。私にできることをやっつていきたくないと思っっています。

Aさん 避難先の自治体にも理解していただいて、個別訪問も一緒にやっつていきたいですね。

Bさん 私は、もっとたくさんの人たちに、福島の子どものことを考えてほしいです。

Eさん 少しでも子どもたちを守るような体制を整えていただくために、これからも声をあげていかなければいけないですね。
Cさん あとは、お母さんたちが元氣になれば、子どもたちも元氣になると思っつています。出産・子育てしやすい環境、女性をサポートする優しい社会になつてほしい……と思っつています。

何を「ゴール」にして活動していいのかわかるか？

「支援者」たちの「これまで」と「これから」

この「福玉便り」を含め、埼玉県では避難した方々に対し、各種の「支援」活動が行われてきました。しかしながら、その担い手がどんな想いでどんな活動をしているのか、知っていたら機会が少なかったと思います。そこで、情報誌「想い」を発行している浪江町の篠原美陽子さん(85)11ページ(照)から、県内で交流会や支援活動を行っている私たちに對して、率直な質問をぶつけていただきました。(まとめ＝編集部・原田)

■活動をはじめたきっかけ

篠原 まず、どのような経緯で支援活動を始められたのですか？

福岡 コープみらいという生協で宅配の責任者をやってきましたが、トップが10年後を見据えて地域ネットワークという部署を立ち上げてそこを任せられました。高齢者の介護支援とか子育てとか、社会的に弱者の方たちを生協の事業であるお店とか宅配にどう結びつけるかを考える部署を作ったのが、図らずも震災の日で、困っている人が埼玉県にたくさん来られたので、第一の仕事が復興支援になりました。



伊藤 2012年の4月からここカフェ@川越という交流会の場を始めました。「いても立ってもいられず」という思いで今



に至ります。周りの方が支えてくださって、ここにいるような形です。
松館 ふじみ野市では震災のあと4月に「避難して来ている人たちの心のケアが必要だから、交流会を開いてくれないか」という声掛けが行政のほうからあり交流会「おあがなんしょ」をはじめました。第1回ができたということで、その後は行政にバックアップしてもらいました。私たちが自発的にやってきました。メンタルサポーターの会の方や、大学生とか高校生とか、そういう人材がたくさん集まったことと、それぞれの人材が持ち味を持っていたことがこの会を支えてきたかなと思っています。

薄井 With You いたまという県の男女共同参画推進セン



ところがあったので、それからは一回ごとに限定するようになりました。また、「避難してきていらっしやる方たちと一緒に何かやるよ」というふうに変わっていったので、一般のボランティアの団体で「ああだこうだ」とやってくださることは少なくしていききました。今でもやりやすいという声がいっぱい

来ますよ。という声がいっぱい来ます。ありがとうございます。また何かの時にお願いしますね」とお断りしながらやっております。

篠原 薄井さんはいろんなママたちを見てきて、ママたちにとって今一番必要だと思つことは何だと思えますか？また、震災後のDV



(家庭内暴力)って、話も、相談として実際にあったりするんでしょか？

薄井 これだけ時間が経ったからこそ、夫婦の関係とか子どもとの関係を言え



りではなくなってきたときに、いろいろなか

られていく人が出てきます。さいたま市なり埼玉県というコミュニティが最後のところでセーフティネットになり得るのかという問題は、避難者支援という

ターで、さいがいつながりカフエという交流会を開いていきます。スパーアーリーナのすぐそばでしたので、シャワーとかくつろぎの場所を提供するといった支援を始めたところから、いろんな縁で、交流会を始めました。また、そこに来られる方ばかりではないだろうということと、県内各地に同じような交流の場を作ることには力を入れてきました。

原田 私は、スパーアーリーナの情報班という形でボランティアに入ったのがそもそもものきりな情報班で、それ以降、埼玉でいろいろグルーブが立ち上がってきたことがわかってきて取材をするようになったのですが、労協協の永田さん・ハンスオン埼玉の西川さんと「ふくしま絆新聞」の埼玉版を作りたいね」という話になり、福島に視察に行きました。震災から1年後に「福

テーマにとどまらず、今後の日本にとって必要ものになってくると思っています。にもかかわらず、やっぱりまだまだ追いついていないな、と。こういう問題にどう対処するのかを今真剣に考えないと、この先10年20年後はもっと大変なことになるんじゃないかというのが、今の時点での結論です。

■「ゴール」は？

篠原 ありがとうございませう。最後に、何をゴールに見据えて皆さんは頑張っているのか、お話ししてもらえますか？

福岡 「支援するんじゃないかと一緒に考えていくパートナーが来てくれたんだ」、「つながったんじゃないかと、もともとつながっている人たちが近くに寄ってくれたんだ」と発想を変えたときに、見えてくるものが違ってくるのではないかと。また、3年間付き合っても、避難者の方々の状態が分かっているよう

で分かってないことがたくさんあるんだということが分かったし、そうなることを終わりがないんです。だから、期限とか時間の問題じゃなくて、「人々が忘れてかかっている大事なことを神様が日本に与えてくれた」と考えられる人を、一人でも増やすような取り組みをしていきたいと

玉便り」を創刊して、県内のグルーブを紹介するところから始まり、それから毎月、交流会のカレンダーやマップ、各種の情報などを掲載しています。

■活動の中で気づいてきたこと、気づいたこと

篠原 ありがとうございませう。あとは個別に質問したいのですが、まずは福岡さん、コープさんが頑張ってくださっていると思うんですけど、売り上げにはつながったんでしょうか？また、コープさんの宅配のネットワークで、避難して孤立している人がいると感じた時に、一歩入った活動というのはできそうなんですか？

福岡 今回の支援では組合員さんの募金を柱にしましたが、募金よりも大切だと思ったのは、いろんな方たちの横のつながりで届けられたものの方が実は大きくて、人と人のつながりとか、生協の組合員さんや職員が「自分たちの組織は、良いことをやっているかも知れない」と思ったことのほうが、計り知れない財産となったと思っています。

伊藤 震災後に動こう、と決めたのは「この時代に生きていく大人の責任」だと思つたからでした。とくに、「原発事故後の子育て」を考え続けたいと思っています。避難されている方との関わり、今福島県内や線量の高い地域に住んでらっしゃる方との関わり、たくさんのお母さんたちとの繋がり、どれも大切で、今後も一緒に考えていきたいいなと思つています。

松館 私たちの交流会の中で「参加者」という言葉を使っているんですけども、なるべく一緒に寄り添いながら、どの人か避難者であろうと何かやるときは一緒に楽しもう、この場所を一緒に共有しようという形で関わっております。避難してきている方たちがふじみ野市にいる限りは、支援の方法は違っても関わっていききたいなと思つています。

薄井 避難した方々と接している、私は聞く側になる訳ですが、「一つひとつの言葉が重く、それを聞いた者として、お前は何かできるのか」と自問すること、今まで続いていたんだと思つます。春から交流会とは別に「謡曲の会」を始めました。一緒に新しいことを勉強していくのはすごく楽しいです。そういうことも

のを、またいっぱい作りたいと思つています。
原田 『福玉便り』はこれまでイベントの告知や報告が多かったんですが、教育だったり子育てだったり介護だったり交流会の中で、今後は何を載せていけばいいのか。ぜひ皆さんにも意見をお寄せいただきつつ、次の年度に向けて準備していききたいなと思つています。

だけじゃなくて高齢者の方たちと会う機会が、配達する時にあるんですよ。感度が良くなること、そのご家庭の異変に気付くことが多くなってきて、そこから各行政と情報をつないでいるんです。対象のお宅まで近い存在に立っていかないと考えています。



篠原 次に伊藤さん。私たちが被災者・避難者は「毎月定例」というと負担だったりする場合もあるんですが、そんな声は上がってきたりはなかったのでしょうか？

伊藤 元々始めるときに、私には「場を作る」だけしかできないと思つていたので、強制的に来ってもらうことは嫌だったんです。逆に「来てくれてありがとうございませう」というふうな思つたので、今の所は「もういいよ」というような声はないですが、ただ状況を見ながら変化していくことは大事なのかな、というふうには思っています。

篠原 続いて松館さん。いろんな団体が多く関わっていることで、その弊害というかが、苦勞されたことなどはありますか？
松館 最初はいろんな団体の発表の場になってしまつよう

篠原 皆さんは緊張しながらここに並ばれたと思うんですけども、「このメンバーにした意味があったんだな」とお話を伺いして思いました。ありがとうございませう。
※2013年12月9日にさいたま市のとぎわ会館で開催された「自立と支援を考えるトークセッション」第3部の内容をまとめたものです。

『福玉便り』読者アンケートから

昨年12月、『福玉便り』編集部に住所をご登録いただいている483世帯と、狭山市役所・草加市役所経由で発送している195世帯を対象にアンケートをお送りし、141人の方からご回答をいただきました。ご協力いただいた皆様に、改めてお礼を申し上げます。ここでは自由記述を中心に、アンケートの結果をお伝えします。(編集部 原田、西城戸)

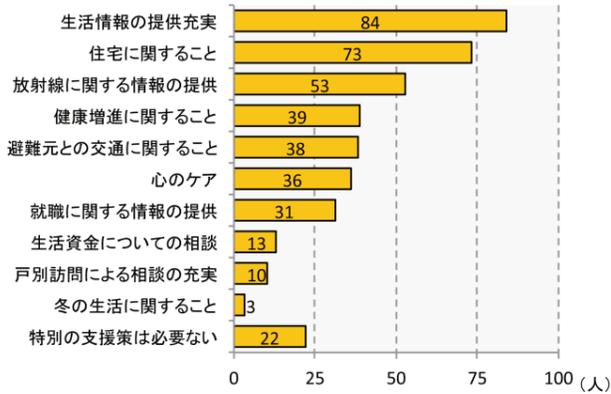
※ご回答いただいた方々の性別・年齢・避難元の地域の分布は、以下の通りです。
 [性別]男性43人、女性88人、未記入10人
 [年齢]三十代29人、四十代30人、五十代24人、六十代28人、七十歳以上26人、未記入4人
 [避難元の地域]岩手県1人、宮城県1人、福島県137人(南相馬市29人、浪江町22人、大熊町17人、富岡町16人、双葉町13人、いわき市10人、郡山市7人、その他18人)、茨城県1人、未記入1人

1. 生活支援について

まず、どのような生活支援を期待しているか尋ねたところ、図1のような回答がありました。このうち回答の多かったのが、「生活情報の提供充実」「住宅に関する情報提供」です。

特に住宅については、自由記述で多くの声が寄せられました。警戒区域の内外や出身県を問わず、住む場所の安定が大きなニーズとなっていることがわかります。
 ・住宅が決まらないと落ち着けないので、期限のない家に住める様な基礎ができたら前に向いて考えることができればいいな
 ・避難先には交通費などが発生し、参加することが出来ません。皆さん同じ思いかと考えています。(大熊町、50代女性)
 ・高齢で遠出はしにくく暮らしており、バスの便りとか、いろいろの交流会とかの知らせがありますが、行

図1. 期待する生活支援(複数回答)



します。自分の位置がわからなくなっている。(富岡町、50代男性)
 ・最初は無料で住める所を自分で探し親子で生活できればと我慢してきた。避難生活が長引くにつれ、あまりにも古い為に床に穴が空いたり雨漏りしたり、ハトやムカデが大量に発生したりで、やむなく引っ越した。借り上げ住宅などへの住み替えを県や市や町にお願いしたが「決まりだから無理」だと断られ、現在は自分で家賃を支払いアパートを借りている。子供の学資保険から借金して支払っているが今年の契約は支払えないと思う。仕事と住む所を何とかしなければと悩んでいる。(広野町、50代女性)
 ・平成27年3月までしか今の所に住めないという事であるので、住む所を捜さなくてはならないこと。低所得である為に家賃を支払って生活していけるか不安である。

活が長引くにつれ、あまりにも古い為に床に穴が空いたり雨漏りしたり、ハトやムカデが大量に発生したりで、やむなく引っ越した。借り上げ住宅などへの住み替えを県や市や町にお願いしたが「決まりだから無理」だと断られ、現在は自分で家賃を支払いアパートを借りている。子供の学資保険から借金して支払っているが今年の契約は支払えないと思う。仕事と住む所を何とかしなければと悩んでいる。(広野町、50代女性)
 ・平成27年3月までしか今の所に住めないという事であるので、住む所を捜さなくてはならないこと。低所得である為に家賃を支払って生活していけるか不安である。

る。(50代、いわき市女性)
 ・震災後主人と義父母を福島へ残し、母子のみ他県に借り上げ住宅を申請し避難生活をおくっておりましたが、特に冬は子供達を車に乗せ福島と避難先との往復の間、何度も命の危険にもあり、主人もまた子供達に会いに来る時に同じような体験を何度も経験した為、この埼玉県に避難先を変えたい。悲しい事に借り上げ住居の移動も認められず、本当の意味で自主避難生活を強いられ、生活が苦しいのが現状です。避難者向けの住居情報もしくは県や市などで安く貸して下さる住居情報がありましたらぜひ教えていただきたいです。(出身市未記入、40代女性)
 ・民間賃貸借り上げ住宅にお世話になっておりますが、私が住んでいた陸前高田市は復興が全く遅く、まだまだ埼玉県にお世話にならないければ生きて行くのが大変です。住宅問題が一番の不安です。(陸前高田市、60代男性)

期待するイベント・交流会について
 期待するイベント・交流会について尋ねたところ、図2のような回答がありました。埼玉県内では各地で交流会が実施されており(6〜7ページのマップ参照)、今後も交流会の継続を期待する声が根強くあります。
 ただし自由記述からは、交流会に行きたくても行けない

2. イベント・交流会

期待するイベント・交流会について尋ねたところ、図2のような回答がありました。埼玉県内では各地で交流会が実施されており(6〜7ページのマップ参照)、今後も交流会の継続を期待する声が根強くあります。
 ただし自由記述からは、交流会に行きたくても行けない

という方が少なくないことがわかりました。その理由には3種類があるようです。

1つ目は、開催地への距離や交通手段の問題。

・避難先のイベントには交通費などが発生し、参加することが出来ません。皆さん同じ思いかと考えています。(大熊町、50代女性)
 ・高齢で遠出はしにくく暮らしており、バスの便りとか、いろいろの交流会とかの知らせがありますが、行

けなくさみしく思っています。(富岡町、70代夫婦)
 ・交流会は同じ子供を持つお母さん達と話してみたいが、場所が遠く、子連れで行くのは難しいので、いつも参加していない。(南相馬市、40代女性)
 2つ目は、日時の都合。
 ・行ってみたいと思う交流会や勉強会がありますが、日時が合わなくて参加できないことを残念に思います。できたら同じ催しを複数回開いて下さると、参加できる機会が増えると思います。(いわき市、50代女性)
 ・避難先交流会はあるが平日の為なかなか参加できない。家族で参加できるものがない。イベントなど色々あると外に出る楽しみがあるて良い。なかなか外出する事もないので・・・(いわき市、30代女性)

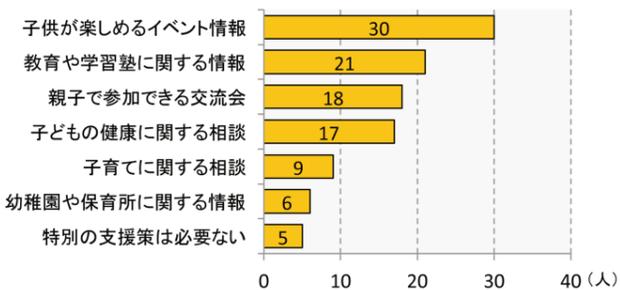
がすぎでしまい、さらに行きづらい気持ちになってしまっている現状。(南相馬市、30代女性)
 ・各イベント等、非常にありがたいかと思っておりますが、出席する方は前向きな方が多く気後れしてしまい、逆に浮いてしまう事が多くなり、結果、次第に足が遠のいてしまします。個別のカウンセリングや悩み相談など、今後あると助かります。(浪江町、30代男性)
 ・避難元の人達と交流したいが、今となっては、どこにも行って全然交流できない。孤独感を非常に感じる。(双葉町、60代女性)

交流会(飲み会)があるといいなと思う。1人でがんばっている。パパさん同士で交流すれば、いろいろと励みになると思う。(郡山市、30代女性)
 こうした声を踏まえて、交流会の場所・日時・内容などを再検討する時期に来ているようです。

3. 子育て・家族について

中学生以下のお子さんをお持ちの48人に、子育てに関する支援への期待をお尋ねしたところ、図3のような回答がありました。回答が多かったのは、「子供が楽しめるイベント情報」や「教育や学習塾に関する情報」です。とりわけ教育に関する情報は、高校受験や進路に関する情報交換を期待する声が多いです。図3の期待する声は自由記述に寄せられました。

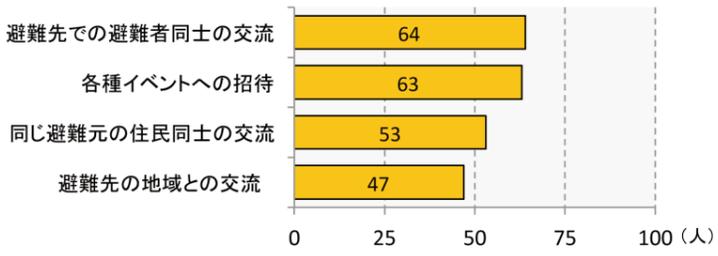
図3. 期待する子育て支援(複数回答)



報があればよかったですし、生の声を聞きたかったです。(いわき市、50代女性)
 自由記述では、保育に対する要望も複数ありました。

・今は幼稚園に入園したので落ち着いていますが、幼稚園に入る前の大変だった時に身近に頼れる人がいなかった事がつらかったので、今大変な人に支援をしてもらいたい。(浪江町、30代女性)

図2. 期待するイベント・交流(複数回答)



3つ目に、交流会に行きたくても、心理的に足が遠のいてしまっていること。
 ・交流会に参加したい気持ちもあるものの、なかなか行く勇氣がでず、時間ばかり

また、同じ地域・同じ境遇の方と集まる機会を期待する声も寄せられました。
 ・避難者同士の交流は現在もありませんが、同じ地元同士の交流もあると嬉しいです。私は南相馬からです。同じ南相馬の方となら面識がない方でも話は弾むと思うのです。(南相馬市、40代女性)
 ・福島で仕事の為に残らざるを得なかった、パパさん達の

・高校の受験事情が、かなり異なり大変でした。もつと情

・保育所入所や学童保育に関して被災者対象の配慮があると助かります。一般の基準になると断られてしまう為、子供を預ける事も出来ず悩んでいます。(浪江町、30代男性)

健康に関しては、福島県の県民健康管理調査について意見が寄せられました。

「県民健康調査のために内部被ばく量を測定して下さい、甲状腺の超音波検査をして下さい」等のお知らせがくるのは大変感謝しています。しかし、その度に福島に帰らなくてはいけないので、時間と交通費の余裕がある時でないとなかなか受けに行く事ができません。子育て中、時間を見つけて、また子供の長旅は子供共々親にもかなり色々な面で負担があります。避難区域という枠にとらわれず、もっとも柔軟な対応してくれる事を期待しています。(広野町、50代女性)

その他、子育て全般について、同じ立場のお父さん・お母さんたちへのメッセージもい

ただきました。

・子育て環境が変わる事が、こんなにも大変なんだということや、学んだ1000日です。避難をしながら今日まで来たママパパすべての人に「よくがんばったよね」と声をかけてほめてあげたいです。私は今年3月まで被災者に対するスクールカウンセリングを受け、先生に毎回ほめていただき励まされ乗り越えてきました。(富岡町、40代女性)

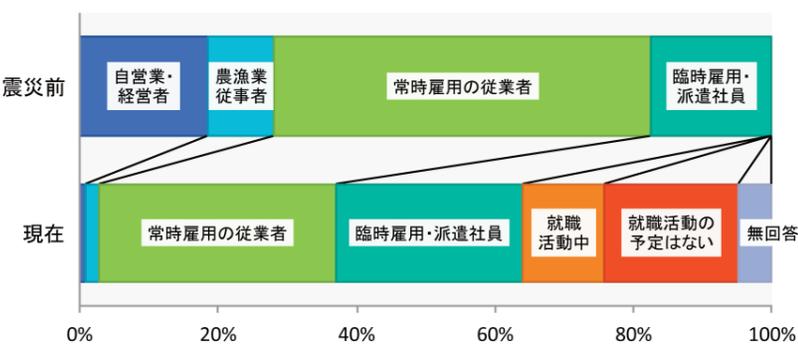
4. 仕事について

震災前と現在の世帯主の仕事について、震災前から何らかのお仕事をしていた103名の回答を集計したところ、図4のようになります。震災前とは異なる職種についている方や、就職活動中の方、休職中の方が多くいらっしやる事がわかります。

自由記述からは、埼玉での再就職に苦労されている方が多いという現状が浮かび上がってきました。

福島での経験を生かせず畑違いの業種に再就職をしたために、40歳にして社会人

図4. 震災前と現在の仕事



年生になってしまった。歯をくいしばって、がんばるものの時々つらくて落ち込んでしまう。就労セミナーや転職の案内があれば、また転職したいと思う時がある。(南相馬市、40代女性)

共働きだった為、収入は半分となり、さらに通勤費の自己負担増、物価の違いで教育費の増加など大変。でも祖母や親戚幼なじみなど育児のサポートがなくなってしまうので働く勇気も

自由記述を見てみると、埼玉県や他県への定住を希望している方、帰還を希望しながらすぐには帰れない方、定住と帰還の間で揺れ動いている方、いずれも難しい選択に立たされていることがわかります。

まず、「地元県(自宅)に帰る予定がある」と答えた方の中には、家族間の意見の違いなどに悩みながら選択をされた方がいます。

・子供は埼玉に残りたいようだが、地元の家族の同意は得ることはできない。家族でもひとりひとり考えは違い、子供の意見をとるなら離婚となり、家を追い出されるような扱いになる。しかたなく地元に戻るとしても今回のような事故から家族の真に思っていることの違いを体験すると、また一緒に生活は前のようにはできないと感じる。いつも心のどこかにひっかかっていると感じて地元で生活するんだらうと思っています。子供だけの寮とかあればと思います。(南相馬市、40代女性)

5. 今後の生活の予定について

今後の生活の予定について尋ねたところ、図5のような回答が得られました。一昨年の12月に実施したアンケートと比べると「埼玉県に定住したい」が若干増えたとも言えますが、

こうした場合を考慮すると、再就職へのサポートは、避難生活が長期化する中で一層重要になっていくと言えます。

次に、「地元県(自宅以外)に

帰る予定がある」という回答には、特に警戒区域から福島県内の他の地域に移る決断をされたという声が複数ありました。安が寄せられました。

・高年齢の母があり、福島県内に中古住宅を購入しました。3年にもなると、そろそろ狭いアパートから今迄の生活に近い環境で暮らしたいと思う様になりました。先がないので落ち着くところがほしいのです。地価が上がってしまい富岡の地価よりも何倍もの値段ですが、富岡へは帰らないので仕方なく決めました。避難者として近所から差別されないか心配です。(富岡町、50代男性)

「地元県に帰りたいが時期は

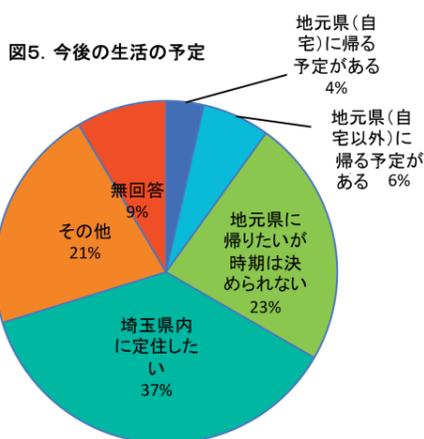
決められない」という回答にも、家族との関係の中で迷っているという記述が複数ありました。

「帰りたい・あきらめる」が毎分毎秒くりかえされて悩む。子供は埼玉での将来に希望を見いだしているし自分は震災前から前に進んでいない。絶望している真つ暗闇。家族の前では辛い顔を出さない。考えるとな眠症になってしまふ。(大熊町、40代女性)

・地元県に帰りたいが土地、家が見つけれられない。また医療が整っていない所では自身の体調に不安があり、母(要介護4)の面倒を見ながらとなると埼玉県の方が良いのかと考えてしまふ。

いつまでも仮の住まいだとか心から安心して生活ができない。埼玉に家と土地をみついても親戚や友人から離れる不安がぬぐいきれない。(南相馬市、60代男性)

他方で、「埼玉県に定住したい」と答えた



「埼玉県に定住したい」と答えた

方も、「帰りたい」という気持ちを抱きながら埼玉で生活されていることが伝わってきます。

・福島に残っている70歳の両親を思うと心配でならない。でも、子供達は高校・中学、2〜3年単位で進学などの区切りがあり悩んでばかり。子供を第2と考えて埼玉にいますが、福島に帰りたいという気持ちはなくなりません。(南相馬市、40代女性)

これ以外に、「その他」や「無回答」を選んだ方からも、回答を選択できない気持ちが多い書かれています。

・震災から2年9ヶ月がすぎ同じように避難してきた方達が福島に戻ったり、こちらで住宅を購入したりと動きだしてきたのを、嬉しくも哀しい気持ちです。自分もどうしようかどうしたらいいかと、日々考えています。主人が福島市、長男が国立市、次女がいわき市、長女と私が越谷市とバラバラに離れてしまふ、どこでもとまって暮らそうか、就職の事もあるので難しいで

このように、迷っているといる点ではどの立場の方々も同じであり、それぞれの方がそれぞれの選択をされているという現状を、改めて共有したいと思えます。(南相馬市、30代男性)

6. 最近感じていること

最後に、「最近感じていること」という自由記述欄には、避

難生活や今後の事に関する不安や苦悩が、数多く寄せられました。そのうちのいくつかを掲載させていただきます。

①自分の住み慣れた生活が奪われてしまったことへの悔しさ。

・最近、特に感ずる事は、年齢のせいか今後の事。元気の時は良いけど病気になるたら親戚もなく兄弟姉妹も近くに居ず、おまけに死んだら息子達はどうするのかと...。原発がなかったら長年住み慣れた町、我が家で何の不安も無く一生を終える事ができたのにも思い、不安と悲しさがこみあげて来ます。息子達に「後ろは振り返るな、前進あるのみ」と言われますが、やっぱりあれから1000日も過ぎたのに町は何も変わりなくあの日のまま。(富岡町、70代女性)

・福島にいる時は畑を挟んで実家があり、米や野菜は全て両親手作りののを食べていた。その時は当たり前で食べていた物が実はとても贅沢だったなあとしみじみ思う。米は混じり気なしのこ

シヒカリ、野菜は採れたてのみずみずしく本当に美味しかった。魚は浜でその日に上がったのを頂くこともあった。埼玉に来て食べるキュウリは水分が足りないと思う。雪も降らず環境や食べ物に恵まれ本当に素晴らしい所だった。その全てを失ってしまったのだと思うと残念で涙が出る。(広野町、50代女性)

②賠償問題によるストレス。

・答えの出せないこと(実は自分の決断ひとつなのですが)を毎日同じことを繰り返されるほど悩み、自分自身に疲れてきます(どうでもよくなってしまう)。知識も計算力も行動力もない私にとって、損害賠償請求問題は最大のストレスです。(浪江町、50代女性)

③放射能による健康被害への不安。

・郡山市に暮らす、知人の娘さんが甲状腺検査の結果、がんと確定し手術を受けられたと聞き、同じ年頃の娘を持つ身として、非常に不安を感じています。家の子

供達ふたりも夏に検査を受け、それぞれに、のう胞が見つかりました。2次検査の必要はなしとありましたが心配はずっと消えることがないと思っています。(郡山市、40代女性)

④周囲からの心無い反応。

・次女が通っている中学校では、福島から避難してきた事を内緒にしています(本人の希望で)。同じ中学校に同じく南相馬から来ている子がいますが、学校で友達に「避難民なんだよねー家とか流されちゃったんだよねー」と今でも言われているという話を聞いて、辛いです。福島から来たと言うのも辛いし、隠しているのも辛いです。(南相馬市、30代女性)

⑤とりわけ区域外避難の方々が抱えている、孤独感。

・震災の事を考えるのがつらく、なるべく考えないようにTVも見ないように、あまり放射能の勉強もしなくなつた。お金の不安、生活で一杯です。もし無料で何でも相談できるような、カウ

ンセラーのようなものがあればと思う。子育ての事、今後の不安など周りに福島の人がないので、震災後の生活の様子を話したりする人もいないのです。(いわき市、30代女性)

・3年経った今でも地域とのコミュニケーションがなく、

このまま見知らぬ土地で頼れる人もいない所で私の生活が終わるのかと思うと、寂しい思いにかられます。各々諸事情が違っていても、原発事故を受けて福島県民全てが傷つき悩み、そして複雑な感情の渦の中で生活を背負ってしまったことを、もっと真剣に事故の当事者方は考えて欲しいと願っています。そんな中で嬉しい気持ちにさせてくれるのは子供達です。けんかをしたりもしますが、ケラケラと笑う姿、そして日々頑張る子供達は生きる力と喜び、そして希望を与えてくれます。どうか国の宝である子供達に明るい未来を、そして健やかな人生を送れるよう、そんな風が吹くことを願わずにはいられません。(福島市、40

代女性)

こうした不安や苦悩を軽減するための場づくりが、引き続き求められています。

7. 現状把握の困難さをめぐって

震災以降、さまざまなアンケート調査が行われています。行政やマスコミなどは、数字で表されたものを「客観的」であると捉えがちです。しかしながら、回答率が極端に低かったり、サンプリングが適切になされていないといった問題も出てきています。世帯別の調査は世帯主が回答するため世帯主以外の意向が反映されなかつたりするなど、多様な避難者像を理解しきれないという側面もあります。

『福玉便り』編集部でも、一昨年に続いてアンケート調査を行いました。『●は○○%』という表記はできるだけ避けてきました。分析データに偏りがある可能性と、そこから出てきた数値自体が世間で一人歩きすることが問題であるためです。現状は、多様な立場の方が多様な支援を必要としているということであり、「こぼれ落ちてしまう声」をどのように

四年目の県外避難者「支援」を巡って

西城戸誠

(法政大学人間環境学部/福玉会議アドバイザー)

■はじめに

震災後、三回目の「三・一一」を迎えようとしています。私は福玉便りの編集の手伝いと、避難者とその支援の調査研究を行ってきました。その立場から、四年目の県外避難者「支援」について考えました。少し専門的な話も含めますが、お読みいただければ幸いです。

■多様な「立場」とそれを支える多様な「支援」

避難者としての「立場の分散」が大きくなっているという現状があります。つまり、「まだ、三年前の避難直後から変わっていない」人もいれば、すでに新たな生活をスタートさせ、「もう避難者とは呼ばれたくない」という人もいます。「立場の分散」は、避難指示区域内から避難をさせている方と、避難指示区域外から避難してきた方との違いや、元々の生活状況の差、年齢や家族構成の違いが、関連していると思われると思います。つまり、多様な立場の避難者(避難者と呼ばれたくない人も含む)の存在を前提に、きめ細かい対応が必要となつていくという点を、今一度、確認しておく必要があると思います。

捉える方法は、一軒一軒、訪問をしてお話しを聞くことです。現在、浪江町の復興支援員が避難者の自宅に回り、避難生活のさまざまな悩み、ニーズなどを尋ねています。一軒一軒の訪問は時間がかかりますが、新たな人々のつながり(ネットワーク)や、必要とされる支援の実態が明らかにできます。浪江町だけではなく、他の自治体でも同様の制度をスタートさせ、復興支援員の数を増やすことも検討する必要があります。

さて、「支援漬け」になつてしまひ自立できない避難者の存在は、避難者支援への批判として以前から指摘されています。一方で、「自立できない人もおり、支援が継続的に必要だ」という声もあります。ただし、生活に密着したニーズであるほど、どこまで「避難者支援」としての枠組みはいまいるのか、避難者ではないが同様の境遇の方に支援が行き届いていない場合など、地域との関係がcausing 難しくなるなどの課題も立ち上がります。

「支援」を巡る難しい課題ですが、二つの方向性が考えられます。第一に、避難者支援にかかわらず、地域で生活支援を行って

いる団体、機関のサポートを得るようにすることです。これまで各地域で避難者支援を行ってきた団体を中心に、地域のさまざまな団体、個人に呼びかけ、協力して避難者の生活支援を行う方向です。

第二に避難者自身の自助団体を立ち上げ、そのための支援をすることです。山形では、避難者による一時預かり事業や、母親のためのお話会の開催が行われています。山形と埼玉では自主避難者の集まり度合いが違いますが、今後、当事者が集まり、自助的な活動を行うためのネットワークづくりが重要でしょう。相対的に生活資源が少ない自主避難者の方は「支援」を求める一方で、後ろめたい気持ちもあるかもしれません。しかし、大切なことは、主体的に選んだ今の生活が続いていくために、地域の多くの人とつながることだと思えます。多くの人と関わることで今の生活の「自立」につながるのです。そして、その中間支援が行政や支援者の役割となるでしょう。

■支援者に求められる「自己再帰性(反省性)」

「支援相手がない」とか「現場に支援者ばかり」という支援者の声がありますが、誤解を恐れずに言えば、ニーズがなくなつた支援は続ける必要はありません。

せん。支援すること自体の自己目的化は、避難されている方を傷つけることとなります。

避難者のニーズは質的、量的に変化しています。震災直後や、自分のイメージで行う支援は不要です。しかし、「支援をしない」という選択肢を単純に選ぶのも困りものです。そもそも「なぜ支援が必要なのか」という点を常に考え、「自己再帰的」(自分に問いかけ、反省しながら考えること)に支援自体を考える必要があります。

■マスコミ、自治体政治家、そして市民の方へ

マスコミの方には、「絵になるイベント」だけでなく、声にすることができない避難者の存在(声が届かない、声を届けること)で逆に周囲からいろいろ言われるため声を出したくても出せないなどを、取り上げ続けて欲しいと思います。それは、福玉編集部にも課せられた課題です。

地方自治体に対しては、一時的にしろ避難先自治体の「住民」である避難者に対しては、その地に良好に住むための、住民サービスを提供する義務があることを再度、確認していただきたいと思えます。また、数字にとらわれず、多様な被害の実態を踏まえ、丁寧な細やかな行政対応が必要で、例えば、避難先へ

に丁寧に拾っていくのか」という点が重要であると考えています。

『福玉便り』では、多様な実態を把握し、その情報共有から問題点の解決を目指していきたいと思っています。どんなご意見でも結構です。読者の皆さんからのさまざまな「声」をお待ちしております。

※紙幅の都合上、自由記述を引用するにあたって文章の一部を圧縮しています。



ありがとうございます!

創刊以来、『福玉便り』の印刷は、『富士ゼロックス埼玉 端数倶楽部』(社員ボランティア)の皆様に全面的にご協力いただいております。また、2013年度は、「赤い羽根共同募金の災害ボランティア・NPO活動サポート募金」(ボラサポ)の助成金をいただいて、発行しました。避難者のグループ、支援者団体などたくさんの方から情報をお寄せいただき、編集しています。また、毎号、ボランティアの方々により発送され、各団体、あるいは各自治体の方にご協力いただき、避難されている方々にお届けしています。



新潟—山形—北海道視察

多様な避難の現状をどう捉え、どうサポートしていけるのか——その手がかりを求めるために、2013年、「新潟」「山形」「北海道」と、区域外避難者の数の多い県に伺い、その避難・生活サポートの現場取材させていただきました。

その様子は、『福玉便り』（2013年9・10月号、2014年2月号）の中でも掲載させていただきましたが、こちらにも記事から抜粋してまとめさせていただきます。

新潟・山形・北海道でお世話になった皆様、
本当にありがとうございました。
(編集部・伊藤)

【新潟県】

◆長岡市「にな二ーナ」

7月に訪れたのは、新潟県長岡市にあるNPO法人「にな二ーナ」。ここでは、2012年4月から「福島サロン」という常設のサロンを福島のお母さんたちが運営しています。代表の中村順子さん(いわき市より避難)にお話を伺いました。



「福島サロン」最後の日。
〔「にな二ーナ」にて〕

「『福島サロン』には、ふたつの目的がありました。ひとつは、お母さんたちの楽しい場となること。もうひとつは、長岡市のお母さんへの目的があり

震災・原発災害のことを伝えることです。」

新潟県内にも20くらい交流会があるようですが、それぞれ地域によって主体が違うようです。例えば、助産師会、ボランティアセンター、あるいは当事者。こういった団体が交流会を立ち上げたのは、様々であるそうです。

◆新潟市「ふりっぶはうす」

8月には、新潟県新潟市にあるNPO法人「ふりっぶはうす」を訪れました。2011年10月に開設された、新潟県内で避難生活を送る人々の交流、コミュニケーション活動、自立支援活動等、新潟県内の避難者支援活動の中心的な常設の施設です。2013年8月現在、利用者



「ふりっぶはうす」入口

上岳志さん(福島市より避難)は——

「新潟県は、警戒区域からの避難者数と、警戒区域外からの避難者(自主避難者)数が1:1です。全国的な縮図であるとも言えるのではないだろうか」と、お話ししてくださいました。

今後は「新潟方式」として新潟弁護士会、新潟大学、県、柏崎市、中越防災安全機構、新潟日報、地元国会議員(超党派)と一緒に、政策提言していこうと考えているそうです。

「気持ちや考えがいろいろな方向に揺れても、『自分はなぜ避難したのか』をちゃんと持っていることが大切です。」という締め括ってくださいました。

【山形県】

◆山形市「子育てランドあ〜べ」

8月末には、山形県山形市にある子育てランド「あ〜べ」さんにお邪魔しました。民家が抛



子育てランドあ〜べに集ってくださったお母さんたち

北海道に移り住んでいる方がいらっしやるはずですよ。小祝さんはそう考えています。

幅広いネットワークが維持されているのは、政治的なことには立ち入らない「行政との連携を大切に」「原発のことをあまり言わない」といった、小さな配慮のおかげではないかと小祝さんは分析しています。

また、原発のことを語ることにあっても、「言い回し」に気を配っているそうです。感情を込めてしまうと「個人の話」になってしまう。淡々と事実を話すことによって、「広い問題である」ということを伝えられる——そのように、気をつけているそうです。

◆札幌市「みちのく会」

「みちのく会」は、被災避難者自身による、自助組織。幅広い避難者のゆるやかなネットワークを作っています。代表の本間紀伊子さんは「そこに居る人ひとりひとりを尊重したい」と

言います。細かい気配りをしながら、とにかく「ネットワークづくり」だけに注力したそうです。「とくに、放射性物質に対する危険性の認識の違いがある中で、それぞれの心と身体を選択を尊重したい」ともお話し

点の「あ〜べ」さんには、福島県から避難された親子が集まっています。代表の野口比呂美さんにお話を伺いました。

「もともと、育児サークルをやっていたので、子育て情報——例えば、小児科遊び場・オムツの安い場所といった生活情報——は持っていました。ただ、放射線の話もできる、福島のママが集う場が必要だと感じて、『ママカフェ』をはじめました。避難している親子がつどい、自由に過ごせる場所として定期的に開催しています。おしゃべりしたり、お茶を飲んだり：ママ同士でつながって「ホッ」と出来る時間を過ごしてほしいと願っています。」

山形県は事故当初から家賃補助など、避難されてきた方に手厚い支援をしています。一時、山形県には空きアパートがなくなり、受け入れがストップしたほどです。福島市・郡山市・伊達市・二本松市・南相馬市の方が多くそうです。県内には一

「何が自立か」というのも、大きなテーマだと言います。人それぞれ、自立の受け止め方が違うので、「自分で自分のことを、選択することが自立ではないか」と語ってくださいました。

「たとえば、生活保護を受けるかどうかを自分で判断する、ということも、『自立』です。」と本間さんはおっしゃいます。その人が「どうしたいか」それを応援することが「支援」ではないか——そう、本間さんはお話してくださいました。

くださいました。

「3年前に、『つながり』はいいことか——という本間さんの言葉が、心に残ります。それはおそらく、この3年で、ひとりひとりの抱える問題が次の段階にうつり、全員一緒に語れる問題が少なくなった現状を投げかけた言葉だったかもしれませぬ。

◆視察を終えて

今後の支援の在り方、必要な情報の多様化など、さまざまな課題をいただいたように思います。今一度、立ち返り、「ひとりひとりの『支援』とはなにか」を考えるとときではないか——そう、感じています。



埼玉から視察に来た母たちと、山形の避難者の母たちとの交流

ところが、はじめてみると、保育事業のニーズだけではなく、お母さんたち自身が「話をする場」を欲しがっていることに気がついたので、放射能のことや避難生活のこと——ひとりきりで抱えていた思いを、誰かに伝える場が必要でした。

「私たちは、仲間同士でとんまで『放射能について』避難について話し合っています。だからこそ、落ち着いて判断できるようにした部分もあります。」

【北海道】

◆札幌市「北海道NPO被災者支援ネットワーク」

11月には、北海道にお邪魔し「北海道NPO被災者支援ネットワーク」の金栄知子さんにご案内していただきました。北海道NPO被災者支援ネットワークは、支援活動を行う北海道内の



「北海道NPO被災者支援ネットワーク」
廃校が事務所に。



事務所内に交流スペースも。

規受け入れが終了してからは、行政の窓口でも、転居扱いされるようになりました。でも、今なお、『避難』や『移住』という形で

福玉便り 2014 春の号外

企画・監修：西城戸誠 (法政大学人間環境学部教授)、原田峻 (立正大学文学部非常勤講師)
編集デザイン：NPO 法人ハズオン埼玉
協力：(一社) 埼玉県労働者福祉協議会・生活協同組合コープみらい埼玉県本部
連絡先：(一社) 埼玉県労働者福祉協議会
〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-4-21
TEL 048-833-8731 メール:fukutama@431279.com

*本誌は、2013年度法政大学東日本大震災復興支援研究助成金(研究代表者・西城戸誠)による成果の一部です。

一人で悩まないで、
ぜひ、ご相談ください



◆埼玉弁護士会

- 弁護士による無料の対面・電話相談**(事前予約制)
予約受付ダイヤル:**0120-013-814**(フリーダイヤル)
[受付時間 10:00~17:00(土日祝日も受付)]
- 「**法律相談センター**」で相談する(時間は30分が原則)
あらかじめ日時をご予約いただき、お近くの法律相談センターまでお越しください。
埼玉県南部の方→埼玉弁護士会法律相談センター048-710-5666
埼玉県西部の方→川越支部法律相談センター 049-225-4279
埼玉県北部の方→熊谷支部法律相談センター 048-521-0844
埼玉県秩父地域の方→秩父法律相談センター 048-521-0844
埼玉県東部の方 越谷支部法律相談センター 048-962-1188
*電話による法律相談は受け付けておりませんので、あしからずご了承ください。
- 原発被害救済弁護団**
相談内容・お住まいの地域等を考慮のうえ、弁護団所属の弁護士をご紹介 弁護団電話番号 **048-642-3883**

◆原子力損害賠償支援機構東京本部での各種相談

相談日毎週 月・水
開催時間 10:00~12:00 場所 機構本部
港区虎ノ門2-2-5共同通信会館5階
<http://www.ndf.go.jp/contact/location.html>

◆行政書士による賠償請求に関する電話での無料の情報提供

賠償請求や申立てに関する手続き、各種公的支援制度等に関する情報提供 **0120-013-814**(フリーダイヤル)
[開催時間 10:00~17:00(土日祝日も受付)]

◆埼玉県司法書士会

電話:**048-838-1889**
【電話法律相談情報】相談内容:法律相談(登記・相続、クレジット、サラ金問題、民事再生、破産、小額訴訟、成年後見、会社設立・変更など)※国民の祝日、年末年始、8/13~15までの期間を除く。
○**埼玉司法書士会の総合相談センター**
(1)浦和総合相談センター 埼玉司法書士会館
電話:048-838-7472 受付:平日10~16時
(2)熊谷総合相談センター 熊谷市宮町2-132-4F
(3)越谷総合相談センター 越谷市越ヶ谷2-8-22-2F
(4)所沢総合相談センター 所沢市緑町1-18-15-1F
埼玉司法書士会総合相談センターでは、無料で相談を承っております。 ※曜日によって、相談内容が異なります。

◆よりそいホットライン

0120-279-338(フリーダイヤル つなぐ・ささえる)
被災した経験を持つ地方自治体の首長や首長経験者等が発起人となり、全国の民間団体に協力を呼び掛けて「一般社団法人社会的包摂サポートセンター」を立ち上げることになりました。「せっかく一度は助かった命を失わせてはならない」。これがホットラインスタートの決意です。どんな悩みでも、一度電話で相談してみてください。一緒に解決を考えてみませんか? ※毎月11日は「震災被災者」専用相談。

◆**SSNあなたも一言!** 避難生活なんでもダイヤル
避難生活上の不満、悩み、お困りごとなど、なんでも、あなたの一言をお聞かせください。専門家が解決方法を一緒に考えます。避難者の方だけでなく、避難者支援をしている方々からの代理電話相談も可能です。
いただいた声は、必要に応じて国や行政に届けます。
TEL **048-829-7480** TEL **0570-078-717**(ナビダイヤル)
どちらの電話番号でも受け付けています。
◆実施期間・曜日・時間
毎週 月曜・水曜・金曜の15:00~21:00
~2014/3/31(月)まで実施。

◆ふくしま心のケアセンター

被災者相談ダイヤル**024-531-6522**
平日 9:00~12:00 13:00~17:00
土日、祝祭日、年末年始(12/29~1/3)は除く
東日本大震災による被災とその後の生活によって多くのストレスにさらされています。
ふくしま心のケアセンターは様々な心の問題の予防と早期発見、人材育成など、総合的な心のケア対策を図るために活動します。
お問い合わせ先(ふくしま心のケアセンター)
〒960-8012
住所 福島県福島市御山町8-30県保健衛生合同庁舎5F
TEL 024-535-8639 FAX 024-534-9917

◆福島就職応援センター

仕事をお探しの方にカウンセリングを実施し、能力・適性に合わせた求人情報を提供して就職を支援しています。また、求人開拓を通して地域企業の求人業種・職種と求職者とのマッチングを推進し、就職を支援しています。なお、生活・就労相談も行っていますので、お気軽にご相談ください。
〔窓口相談〕専門の相談員による就職相談・職業紹介や生活・就労相談を行い就職等を支援しますので、お気軽にご相談ください。また、独自の求人開拓を行い、求職者と求人企業のマッチングを図りながら就職支援と併せて企業の人材確保を支援していきます。
〔東京窓口〕ふるさと暮らし情報センター内 〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-10-1 東京交通会館6階
TEL.**03-3214-9009** / FAX.03-6273-4404
ご利用時間 月曜日~土曜日 10:00~18:00 休館日 日曜日・祝日・8月13日~15日・年末年始(12月29日~1月3日)

◆埼玉県の東日本大震災復興支援相談窓口

電話:**048-830-8281**(危機管理防災部危機管理課)
○午前8時30分~午後5時15分(土・日・祝日を除く)
○相談は、原則電話で受け付けます。
・公営住宅・民間賃貸住宅の入居について
・就労支援について
個人向け ・原発事故に伴う健康相談窓口(保健医療政策課)
・外国人のための災害関係相談窓口(国際課)
事業者向け・中小企業に対する支援策・相談窓口(産業労働政策課)
・農業相談窓口(農業政策課)